【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年十一月十七日～十二月）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goei, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect 作成者: 小西, 洋子, 木越, 隆三, 黒田, 智, 室山, 孝, 吉田, 航志, Konishi, Yoko, KIGOSHI, Ryuzo, Kuroda, Satoshi, MUROYAMA, Takashi, YOSHIDA, Kazushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064105

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

人間社会環境研究　第42号　2021．9

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年十一月十七日～十二月）

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
小　西　洋　子
石川県金沢城調査研究所　前所長
木　越　隆　三
人間社会研究域学校教育系　教授
黒　田　　智
小松市史編集委員
室　山　　孝
人間社会環境研究科　人文学専攻
吉　田　航　志

Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

KONISHI Yoko
KIGOSHI Ryuzo
KURODA Satoshi
MUROYAMA Takashi
YOSHIDA Kazushi

Abstract

Utoki was a daily journal kept by Shuko, the eleventh chief priest of the Shokoji Temple in Komatsu, during the year 1769. The journal is famous for the historical information it contains on Komatsu-jian-sodo. Utoki not only has important information about the Jodo Shin sect of Buddhism in the Edo period but also various stories that Shuko recorded that should capture the interest of researchers. It is our intention to introduce a reprinting of the entire text in several installments. We hope that researchers will use our reprint to deepen discussion on Komatsu-jian-sodo.

Keyword

Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goei, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年十一月十七日～十二月）

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
小西洋子
石川県金沢城調査研究所　前所長
木越隆三
人間社会研究域学校教育系　教授
黒田智
小松市史編集委員
室山孝
人間社会環境研究科　人文学専攻
吉田航志

要旨

小松称名寺所蔵『烏兎記』は、小松勝光寺十一代住職周好による、明和六年（一七六九）一年分の日記である。特に「小松寺庵騒動」に関する史料として知られている。また、周好が日々伝え聞いた話が書き留められており、小松町周辺のみならず、大聖寺・越前の出来事など、その内容は多岐にわたる。

本史料の従来の翻刻は誤脱もあるため、改めて全文を翻刻し、紹介する。翻刻により、多くの研究者の利用に資したい。本稿は六回目であり、今回をもって完結となる。

キーワード

「小松寺庵騒動」「郡中御影」　能美郡　近世浄土真宗

【翻刻】

十七日

一、朝ゟ気色宜布、次第ニ快晴致、静成天気ニ而候、且又夜ハ宵之程者風雨無之候処、夜ニ入候而者余程風有之候而、騒布候、

十八日

一、鶴来を出立致直ニ帰寺之趣ニ而出候処ニ、朝ゟ風も少々有之、雨も降候得共次第ニ霽、天気宜布相成候而、夜も静ニ御座候、且鶴来ゟ之帰るさ河原新保村之門徒之方へ立寄候所ニ、一昨日京都ゟ御使者幷ニ御使僧下り候由咄承之申候、既ニ帰着之刻承候処、其由直正ニ而、御使者者横田内記（重長）与申候而、内御用人之由、御使僧者澍法庵、十六日四ツ頃ゟ当所を通、松任泊り之旨承之申候、

十九日

一、朝ゟ気色宜布候而、一向ニ風雨無之候、夜も宜布静ニ候、

一、一昨夜九頃ニ而も候哉、余程地震致候旨、茶屋善兵衛咄候由、左

兵衛ゟ承之申候所、其夜知照岩本村ニ止宿致候ニ、右之由承候与咄申候、

一、十六日寺社所ゟ御触到来ニ付、角院殿（本蓮寺）ゟ被相触候文言如左、

江戸表ゟ他国へ銭多ク渡遣間敷旨、先年相触候得共、当時鋳銭定座被仰付幷真鍮銭吹立、諸国通用之為ニ候間、国々江銭遣候義勝手次第たるへく候、右之通可被相触候、

九月

松平右近将監（武元）殿御渡候御書立写壱通相達候間、被得其意、答之儀ハ依田豊前守（政次）方へ可被申聞候、以上、

九月十六日　大目付（依田政次）

松平加賀守（前田重教）殿留主居中

諸国通用之ため、当時鋳銭幷真鍮銭吹立就被仰付候、従公儀相渡り候御書付写相越候条、被得其意、組支配之人々江可申渡、組等之内才許有之面々ハ其支配江も相達候様、可被申聞候事、

前田駿河守（孝昌）印

十月十四日

本多安房守（政行）印

篠原弥助（保之）殿

永原求馬（孝乗）殿

伊藤内膳（正周カ）殿

別紙三通之趣被得其意、夫々可被申渡候、尤門前之輩江も不相洩様ニ是又被申渡、先々被相廻、落着ゟ可被相返候、以上、

篠原弥助印

己丑十月十九日　伊藤内膳

不有合

永原求馬

不有合

小松

本蓮寺

別紙三通之趣被得其意、夫々不相洩様ニ被申渡、先々被相廻、落着ゟ可被相返候、以上、

十一月十六日　本蓮寺印

本覚寺

勧帰寺

本光寺

勝光寺

円光寺

願勝寺

称仏寺

静照寺

尚々早速被相廻、落着ゟ可被相返候、以上

右之通り申来候条、各々被得其意、門前之者共へも不相洩様ニ可被申渡候、以上、

己丑

十一月十七日　勝光寺印

浄誓寺

正行寺

右之通触渡申候、

二十日

一、日之内者朝ゟ宜布気色ニ而御座候而、一向ニ風雨等無之、時節不相応之快晴ニ而、夜も宵之程者風雨無之静ニ而御座候所、夜九頃ニ而も候哉、当所米屋町鍵屋与兵衛与申者之方ゟ出火致、西町・八日市町・了助町・東町之内類焼致、都合七拾軒余焼失致候、勿論大キ成家共不残焼失致候故、火先以之外強ク候而騒布事言語道断之事ニ候、乍併此町之寺庵者不残遁大慶不過之存候、先年之大火ゟ者三拾壱年目ニ而御座候由取沙汰致候、火しめり候後も騒布事無斗候、

二十一日

一、今朝六半頃過ニ火事与得静り、各々安心致候、拙寺抔も是迄之働致候、去共遁候故大慶難申尽候、気色も宜布候故、道具抔損無之始末致、失物等も無之、別而悦申候、夜も風等無之候得共、騒布候所、夜も九半頃ニ而も候哉、以之外之大雨ニ而、物静ニ相成、尚々無此上も事ニ而御座候、当寺之門徒六軒焼失、冬ニ付、且寒前嘸難儀可有之候与不便ニ存候、其外昼夜異変無之珍重ニ存候、

二十二日

一、朝ゟ気色不宜候而、夜者雨少々降申候、其外相替義無之候、

二十三日

一、夜前八頃ニ而も候哉、金沢御坊へも番安田十兵衛を使者として、申候口上之覚、今度出火ニ付勝円寺類焼致候旨承之候、尤遠慮中ニ而候得共、御慈悲之上を以、小家掛等之御申付可被成候、御組頭故右之趣御使者横田内記、御使僧澍法庵申候与而、則覚書等指出、尚此義京都家老中へも可及御沙汰候与之義、申候と使者演申候、隣院殿返答ニ者此方ゟも御本山へ申上候与御答被成候旨、御咄有之候、自夫今朝五頃金沢御坊ゟ之火事見舞として被遣候与而、御仲間中歩行申候、

一、朝ゟ雨しめ〳〵と降、折々風も有之候而、夜も風雨折々降吹申候、

二十四日

一、朝ゟ気色不宜候而、雨しめ〳〵与降申候所、九過頃ゟ風吹渡り、殊ニ暮合ゟ夜ニ入候而者、余程之大風、時節柄故霰抔降、雷鳴、余程荒候得共、明方ニ者次第ニ静ニ相成申候、

二十五日

一、当所八日市町勝円寺類焼致候ニ付、遠慮中故当役勧帰寺殿、助役手前両人ゟ、京都御家老中迄及案内候、書面文言如左、

一筆致啓上候、先以御門跡様御機嫌克被成為御座、恐悦ニ奉存候、然者当廿日夜当所出火致、勝円寺類焼致候、尤五尊等無御障、且住寺無別条引退申候、御咎遠慮中ニ候得共、小屋掛之義申付候、右芳々為御案内如斯ニ御座候、恐々謹言、

勝光寺印

十一月廿二日

勧帰寺印

月番

御家老御衆中

右之通相調、当廿五日出之、三度ニ為登申候、

一、朝ゟ風雨・丸雪等降吹荒候而、夜之内も尚風はけしく荒、雪吹申候、

二十六日

一、早朝ゟ天気宜布候而、風雨等無之候、夜も静ニ而雪吹荒等一向ニ無之候而、至而もの静ニ而、昼夜無難ニ有之候、

二十七日

一、朝ゟ曇り気色ニて次第ニ風雨、丸雪杯降続申候て、夜も其通音すさましく霽間無之候、去共明方ニ者音静ニ相成申候、

二十八日

一、日之内者朝ゟ天気不宜、折々風雨降敷候得共、次第ニ霽、風も止ミ、夜者静ニ而御座候、

二十九日

一、日之内も朝ゟ折々小雨・小丸雪抔降、又ハ霽候得共、夜者折々風雨頻ニ而御座候、

三十日

一、今度御本山ゟ御使者横田内記・御使僧澍法庵御差下シ、能美郡一件御取嘸之義、所詮赤井殿（称名寺）当春上京有之候而、色々於御本山虚言を被申、尚又帰国之節も不相済義を御聞済之様ニ被申候抔申様成義、区々重品有之候ニ付闕官可申渡旨ニ候、又大垣内殿（勧帰寺）者当年当役故不取嘸之旨ニ而遠慮可申渡旨、残り本光寺殿（本覚寺）・寺町（勝光寺）・拙義者返答次第可取計旨、且又灯明寺義ハ町郡之飛檐以下之頭取致候ニ付、是又遠

慮、教恩寺義ハ当年本役年行事故、是又遠慮可申渡旨、其外印形致候寺庵不残御尋事有之候与之事、委曲者存不申候得共、御本山御役所之馴シ如此与、出所有之候而、右之由承候与而、来生寺咄ニ承之申候、相考候所本蓮寺ゟ出候評判ニ而候様ニ被存候、乍併難心得趣者、本山之評定を被承候事ニ而も無之筈ニ候、且今度御差下シ之両人、右之旨を蒙御意居申候与も咄申事ニ而も無之、大事者大事程隠密ニ可致筈ニ候、当春仲間惣代ニ赤井殿上京、御使僧願之事、御聞置御聞済之所者、難心得存候得共、加様ニ御取計可有之程之重キ事ニ而も無之、且大垣内殿遠慮之義も不取哢与申事ニ而も無之、郡一統御門末不納得之事ニ候得者、如何可仕与之窺上置候得者、是又御取計之所難致承知、又残三ケ寺者返答次第与申事贔屓之沙汰歟、尚更難心得、且灯明寺頭取致候事、合点行不申候、印形之義ハ各々可任心段、仲間烈座之上為申聞候而、各々任勝手ニ候得者、是又灯明寺之頭取与申事ニ而も無之候、又教恩寺へ可被申渡之事、随大垣内殿ニ難心得、先ハ此取沙汰者難得其意事共ニ候得者、可申談義ニ而も無之、気之毒成人之口先哉与思斗ニ御座候、

一、朝ゟ折々雨しめ〳〵と降候而、不宜気色ニ而御座候、夜者少々風も有之雨・丸雪抔折々音強ク降申候、

極月朔日

一、朝ゟ気色不宜、折々者風雨・丸雪等降申候而、夜も同ク折々ハ風雨等有之候、

一、金沢於観音山浄瑠璃之会有之候所、見聞之ため行候者ハ壱人鵝目五拾銅宛ニ而御座候、其浄瑠璃稽古之内へ者奉公人又ハ他国人入不申由ニ候、稽古与者乍申、且者世渡之ためニ致候所、頃日之入夥布一日ニ四拾貫程宛有之候由、土室村ニ而承候旨、知照咄申候、何事茂大場故面白事共御座候、

二日

一、朝ゟ曇居申候得共、一向日之内者風雨無之候所、暮合ゟ雨少々降、夜ニ入候而者風雨・丸雪抔降荒、雷少々鳴申候得共、明方ニ者静ニ相成申候、其外ニ面白キ事者差而無之候、

三日

一、朝ゟ浮西空ニて日之内二三度も暫宛風雨頻ニ吹降申候、暮合ゟ者雨頻ニ降、音すこく候処ニ、又夜ニ入候而者風荒ク吹、折々雨・丸雪抔降敷候而、音麁ク候処ニ、八半頃ゟ者少シ静ニ相成申候而、明方迄者其通ニ而御座候、其外昼夜共ニ無難ニ而、又面白事も無之候、

一、せき野直参道場覚住一件之事、此度御使者横田内記・御使僧澍法庵両人下候ニ付、彼覚住西へ帰山致居申候者を取返可申与之手便ニ与而、澍法庵計を以改作奉行へ使僧を以御本山ゟ与号シ、太刀・馬代を遣申候而、其後彼せきの覚住一件帰山御取返シ之義を頼申候所ニ、改作方ゟ申候者、其一件ニおゐてハ改作方ニ而差而指支之無之間、何様成共御取計次第ニ可被成、且帰山之義ハ左右方御相対を以被成候義ニ候得者、如何可取計様無之候、是又無是非事ニ候与之返答ニ而、無所詮事ニ而御座候趣、於金沢取沙汰有之候由、赤井殿御咄ニ承之申候、元来澍法庵と申僧ハ御本山之威光を不考、追従軽薄を以、自身斗之身振之宜布様ニ可致与之心底成者与相見申候、畢竟者不宜御家来ニ而御座候、

一、せき野覚住新発意慈門者帰山ニ付、常楽台之養子与被成、越前福井ニ内陣ニ地を得候、是又赤井殿御咄ニ而候、

四日

一、日之内者朝ゟ気色宜布候得共、寒風強ク候、夜者風雨も無之、殊ニ静成気色ニ而候、去共寒時近ク候間、寒弥増ニ候、

五日

一、夜前九半頃、了助町を呼通ル声を聞候得者、西町・了助町者不残火ニ相成居申候与呼走通り申候、就夫先頃西町出火之砌も、其前夜西町者火ニ相成申候与呼通申候、依之夜前も余程了助町辺者騒布事ニ而候由承之申候、何之道ニも不面白事ニ而候、

一、御本山御使者横田内記一昨日当所被参候由、今江御蔵利右衛門咄申候、是ハ慥成義ニ而候与申候故、様子重而相尋候得者、金沢ゟ去方へ書状参、小松之様子如何ニ候哉与之事有之候を見申候与之由咄申候、乍併いまた承不申事ニ而候与申候得者、如何之訳ニ而候哉、左様ニ者見申候得共、若々見損ニ而も候哉、其義ハ先御評判御無用ニ可致旨、帰りさまニ申帰り候様子、無心元存候、

一、朝ゟ日之内者気色宜布有之候得共、七半頃ゟ風少々吹渡り、暮合ゟ又雨降続、少シ之霽間も無之、夜ニ入候而者折々風も少々有之候、其外昼夜共ニ別条無之候、

六日

一、夜前ゟ降通シ候雨ニ而、朝ゟ霽間無之候得共、八頃ゟ雨も晴明り、風も静ニ相成、気色宜布見候処ニ、暮合ゟ又雨降出シ、夜も折々雨者強ク降申候、昼夜共ニ差而別条無之候、

一、頃日於本蓮寺殿者、御本山より之御使者・御使僧参候由ニ而、座敷之しつらひ、畳之表替抔有之候由、承申候、

七日

一、当四日ニ澍法庵者上京致候、当所ゟ者蛭川屋八右衛門兄弟分之者荷物を馬ニ附参候故、石切四兵衛途中ニ而逢候而、何者之荷物哉与相尋候得者是ハ澍法庵ニ而候旨申候、夫ゟ分レ四兵衛者帰り道ニ而見候得者、今江村中村屋之門トニ而、駕立居申候見候所、長ケ高ク相見候僧能ク寝入被居申候様子、其形相顔形等咄申候所、澍法庵之様子ニ相聞候由、今日隣院殿御咄承之申候、何之道ニも当郡へ被向候御使者・御使僧ニ而候ハ、、唯今頃者最早可被見筈ニ候得共、取組事間違之品有之候故、是迄及延引候哉、無心元存候、

一、当郡一件之義ニ付、罷下り候御本山ゟ之御使者・御使僧ゟ、当国■■■寺社所へ取入被頼候得共、当郡一件取計事聞入不申候由、来生寺咄ニ而承之申候、

一、朝者しめ〳〵と雨降候得共、四頃ゟ霽明り而、又暮合ゟ降出シ、夜豫雨散々降候而、明方迄降続申候、昼夜共ニ差而別条無之面白事も無之候、

一、頃日本蓮寺殿出府有之候而、色々之事も有之候旨、則来生寺咄ニ承之候、

八日

一、雨者夜前ゟ降通シ、霽間候処ニ、九頃ゟ少々霽明り候得共、七半頃ゟ又降出シ、雷鳴候而、雨・丸雪抔降敷申候、夜も霽間なく降候処ニ、夜七頃ゟ風強ク吹渡り、寒一入ニ而、電夥敷降続、明方迄も其通リニ而、終ニ其儘ニ而夜者明申候、

一、当二日ニ鶴来安藤半助出府致、御坊町ニ而去方へ参咄居申候内、今度御本山ゟ御使者幷御使僧御差下候ニ付、粟津主税方ゟ御坊御肝煎磯辺屋五郎兵衛方へ書状参候旨咄申候ニ付、如何之状之趣ニ候哉与相尋候得者、其宿之亭主申候者、其状者今度御使者初而其地へ御差下シ候間、宜布御取持頼入与之趣ニ而候由咄申候、就夫安藤半助尋候者、今度御差向之御使者者何之趣ニ候哉、評義被聞候事も無之哉与申候得者、去者今度之御使者者先達而御使僧澍法庵ゟ葬式年忌等之砌、且又毎歳報恩講御取越等之節之志等をも少々宛勘弁致、余慶を以御本山へ上納有之候様ニ被申渡、御帳面等も渡り居申候、就夫今度者弥其趣厳重ニ、以後者懇志を可運候様ニ与之御請を可被申候様ニ与之事ニ而、今度御使者御差下シ之事ニ候由承候、併磯辺屋五郎兵衛之咄ニ承候得者、今度之御使者者能美郡之不正義御取計之ため、尚又其義ニ引懸郡御真影之一件も出可申由ニ候由、咄ニ承申候与安藤へ咄申候旨咄申候ニ付、又知照相尋候者、御使者歟、又ハ御使僧歟両人之内、此間帰京之者者無之候哉与相尋候得者、其義ハ一向ニ存居不申候得共、院主ゟ之御尋ニ候ハ、、相尋重而重而為御知可申候与申聞候趣、鶴来ゟ帰り知照咄申候、

一、先達而書記置申候於京都之塩売之事、是ニ一ツ之妙有之候、其趣者塩売候ニ三銭之価ニも山之如ニ盛候而、壱升五銭之価ニも如其ニ

而、則我升ニ而も無之、向々升ニ而斗候、其斗口之妙成事絶言語申候、乍併後ニ其斗申候塩を見候所ニ差而相替義無之、三銭者三銭程之塩、五銭者五銭程之塩ならてハ無之候、其手品之宜布故一入流風致候、就夫西三条殿之御姫公与密通之義終ニ洩止事を不被為得、御姫君者塩売之旅宿江忍被成御入候故、塩売者評判之通り三条殿之門前ニ而切腹致死居申候、御姫君者御親父ゟ御勘当為受候旨、京都ニ而取沙汰致候、就其義京都ニ而之狂歌

しほ〳〵と冥途のミちは
山はかり
ひとりはやらし
我も三条

と申狂歌有之候旨、宇都宮正安舎弟当春上京致、頃日帰国ニ而、則其塩売之死居申候体も見受申候与狂歌抔委曲ニ咄申候所、子細者先達而之通ニ違無之候由、承候与知照咄申候、

九日

一、先頃帰京致候者、澍法庵ニ而者無之候、西之御使僧ニ而御座候、就夫セき野村直参道場覚住一件者、終ニ西之御使僧者勝利を得、東之御手者切レ申候与之取沙汰赤井殿御咄ニ而候、

一、今度御差下シ之御使者横田内記義、専光寺殿与出合色々咄候処ニ当郡一件之咄出候処ニ横田氏申候者、小松御仲間者如何之義ニ候哉与相尋候得者、則専光寺殿被申候者、今者皆若手ニ而候得者、気風者存不申候得共、何連も大禄ニ候得者、門徒之内ニ智謀勝ル発明之者も有間敷義ニ而も無之候得者、御取計之事共与得分別を被極候而、可然被存候、被申候所ニ、是ニ御使者も余程気ニひつミ参候哉、先月廿九日ニ本蓮寺松任泊ニ而晦日ニ出府有之候、横田氏ゟ被申候者、其元取計之一件之義、若々不存寄処ゟ崩可参義ニ而も無之候与得詮義も被遂心中も堅リ居申候哉与、押而被尋候得者、本蓮寺被申候者、年来之望ニ而候得者与得詮義も遂置申候与被答候、唯横田氏申候者、乍併与得示談も可有之義ニ候而、被申候由、赤井殿御咄ニ承之申候、

一、金沢御坊弐拾人講中之内ゟ最初ニ傳道寺屋平右衛門与申者を、横田氏ゟ被呼候而、段々能美郡之一件被咄被問候内、此度之義者雙方之中カへ立候而可取計事之様ニ被仰渡、且又於京都、加賀役人之義ハ不残手ニ入候様ニ、本蓮寺幷澍法庵申候故、御差下シ有之候所ニ、此元へ参シ承合候処ニ、於京都本蓮寺抔之被申候事与者、格別ニ相違之義共有之候而、以之外重キ事ニ可成行義与被存候、其上当国者風義有之候国情ニ候得者、中々本蓮寺抔之被申候事与者、格別之義ニ而候、如何致候而、可然哉、心頭へ落着不申候与被申候所、平右衛門申候者御尤ニ存候、乍併御本山公辺へ御頼被遊候而者如何可有之哉与申候得者、内記申候者、夫者少胸之思クゟ者左様ニも可被存筈ニ候、夫故ニ事大変ニ可及義与被存候、勿論御頼之事も易キ義ニ候得共、双方共ニ御歴々之義ニ候得者、難成与者不申、唯永引騒動ニ相成、国之難題与後して可成義を気之毒ニ存候、其元之了簡者少キ事ニ而候、左様之義ニ而者此度之義難行事ニ候申候得者、平右衛門申候者、先是ハ御咄有之候故、町人切之了簡申上候与而、其座者其儘ニ而退出致候由、是も赤井殿御咄ニ而候、

一、加賀郡奉行無木九右衛門（木梨政仲カ）台所を致候、戌亥屋伊右衛門者則御坊之講中ニ而候、此手筋を以当郡之一件を手入致候所ニ、今江村源助を呼寄、委曲小松之一件ハ近辺之義ニ而候得者、承居申候事も無之候哉与被尋候所ニ、源助申候趣者、成程近辺之義ニ而候得者、風聞者承居申候得共、委曲者不存候、勿論能美郡之御真影之義ニ付候而者、私共之可加義ニ而も無之、於御改作差問之義共も無之候、乍併後生之一大事者祖師之教化を於本山数代を伝法致シ、末々之門徒へ者其檀那寺ゟ教候事ニ候得共、元来祖師之依教、後生之一大事も定候事ニ候、恩徳も有之候得者、強而能美郡之一件被仰渡候而も、後生ニ者替不申、一命を掛候程之義ニ相成候ハ、、随而毎歳御収納有之候

物々も捨行可申義ニ而、乍併拾万石や弐拾万石捨候与も、殿様之御手前ニ者少々之義ニ候得共、夫を御咎有之、能美郡一統御作法之通被仰付候而、不苦事ニ候、乍併御仕置被仰付候与も、其御収納之出来申事も無之、尚又左様ニ候得者、殿之御損失国之騒動ニ御座候、左候得者、畢竟者無益之事ニ候、能美一郡之御寺法之一件者、差而御改作之障ニ相成候義ニ而も無之候得者、如何様成共御寺法ニ可被任由迄ニ而、尓与御返答者不可然存候旨相答申候得者、大概ハ是ニ而郡改作方も手切候様子ニ相聞申候由、赤井殿御咄ニ候、彼是之趣共承合相考候処ニ、本蓮寺抔之被申候与者、相違之事も可有之義与被存候、

一、於寺庵常ニ九字十字之御名号奉掛候節ハ三花束（三ツ是ニカ）而已ニ而、灯明を上不申事者本願寺之古実ニ而候、其由者本尊乍建灯明を名号奉上者二仏を幷ニ尓也、今御名号ニ灯明を不挑事者、二仏幷ぬと云当流之古実也、乍併三花束者為敬と可心得之事、金沢野町因徳寺殿ニおゐて城ケ端善徳寺謝徳院殿被咄候由、赤井殿御咄ニ承之申候、

一、於御堂太子七高僧を奉掛様之事、須弥壇無之寺ニおゐてハ太子之御影を向而本尊之左ニ奉掛、七高僧者向而本尊之右ニ奉掛事古例ニ候、其趣者可依垂迹事ニ候、依之於御本山も阿弥陀堂向而須弥壇之左之奥之壇ニ者太子之御影、向而須弥壇之右之奥之壇ニ者黒谷（法然）之御影ニ而、残リ六祖者余間ニ奉掛有之候、須弥壇無之候寺ニおゐて、余間へ奉掛候与も其心得可有之事ニ候旨、則隣院殿御咄ニ承之申候、

一、前卓之下香炉之火を取候事者、向而左之輪灯ゟ取候事古格ニ而御座候、其由ハ先年金沢御坊遷仏之節、御坊之役僧右之輪灯ゟ取候得者、其砌御差下シ之御使僧之為了簡与遠慮申付候、其趣も相尋候得者、去者向而右者仮令御成無之候而も御座ニ而御成同事ニ御座候、然者其御前ニ向ひ乍立火を取候事不敬之至ニ候間、遠慮申付候、御坊ニ相勤居申候者之加様成事を不存事ハ、古格不覚無調法候間、右之通り申付候与相答申候、是誠ニ道理之致所ニ而候由、赤井殿御咄ニ而候、

一、夜前ゟ風者吹通シ、朝ゟ次第ニ風も余程強ク吹候而、雪・丸雪抔折々降敷申候、尤今暮六ゟ寒ニ入候候得者、尤成事ニ存候、夜も寒風強ク吹通シ候而、最早明方ニ者雪弐三寸積申候、是誠ニ寒ニ入候験ニ候、

十日

一、串村駒屋宇兵衛下女者、江沼郡御畑出生之者ニ候、此者主人ゟ明年之給銀を貫ひ、鳥目弐貫文、其女之弟今年拾六歳ニ相成候者ニ為背負遣申候処ニ、出生之在所御畑村間近キ所ニ而、其事を知り居申候者之仕業ニ而候哉、鎌ニ而殺害致置候而、其銭を取候ニ、其人之親迎ニ出候得者、右之通ニ候を負帰宅致候而、相断候哉、大聖持ゟ検使両度参見受候所、弥鎌ニ而殺候疵跡ニ而候間、両度共ニ大方者当在所之者ニ候様ニ相聞候間、与得僉儀可致旨急度役人へ申付帰り候由、就夫則其女之主人駒屋宇兵衛も昨日大聖持へ被召候旨、知照咄之申候、

一、風者昨朝のことく吹通シ候得共、少シ昨日ゟ者和キ吹渡り申候而、雪・丸雪ハ降続申候、夜も同辺ニ而唯風音すこき荒之夜、折々者丸雪抔之降音強ク、又ハ雪吹候音而已ニ而、夜者明ク候、其外替り候面白キ事共者差而無之候、

十一日

一、風は夜前ゟ吹通シ、朝ゟ包雪降又折々者雪吹渡り候而、夜も同ク大雪吹、又折々者昼夜共ニ折々者宜布気色ニ霽渡り候事も有之、不定成事ニ候、乍併一昨日頃ゟ者少々荒も日馴申候斗之事ニ而、去共風者少々和キ申候、其外面白事者無之候、

十二日

一、風者夜前ゟ吹通シ候得共、前二三日之様成事ニ而も無之、朝ゟ唯折折寒風有之少々宛其度毎々雪吹候得共、七頃ゟ者風も大キニ和キ最早可吹止程之様子ニ相見申候而、暮合ゟ風も余程物静ニ間有之

候、去共夜之内も折々少々宛風雪吹抔有之候得共、最早明方近ク相成候而者、殊之外静成様子ニ相聞申候、其外昼夜共ニ珍布面白事共ハ無之候、

十三日

一、先達而書記置候江沼郡御畑村之人殺之事、殺候人ハ一家相（ママ）之者ニ而、其拾六歳ニ相成候童子御畑村ゟ串村へ参候途中ニ而出合候而、相尋候様者何方へ参候哉与申候得者、其童子之相答候者、我姉之給銀受取ニ参候由申候得者、其事を聞、其童子之帰所を待伏致居申候而、旁ニ有之候柳之枝を折、其枝之とかりニ而指殺シ、半死半生ニ相成居申候者を田之中へ踏込候而、給銀鳥目弐貫文持帰候を奪取候而、殺候人ハ帰宅致候処ニ、其被殺候親迎ニ出候処ニ田之中ニ被踏込、半死半生ニ成居申候者を涙なからニ負帰候而、其様子相尋候処ニ、苦敷息之下ゟ其奪取候者之名前を申聞候故、其奪取候者之方へ行、手前之悴之串村ゟ貫参候給銀鳥目弐貫文不存候哉与相尋候得ハ、一向ニ不存与相答、彼是論合候最中へ其村之役人共参シ、見断致候処ニ奥ニ者俵物七八俵程有之候得共、銭ハ相見不申候処ニ、其家之祖母臥居申候床之下ニ鳥目弐貫文有之候事慥ニ見届、夫ゟ委曲大聖持役所へ及断候得者、検使立疵所慥ニ見届帰候由、知照咄申候、其殺候者ハ被殺候者之隣村富野村六兵衛与申者之由ニ而、則其人者手錠を打、大聖持へ被引候由、能美屋九郎右衛門咄ニ承之申候、

一、風者夜前明方近ゟ一向静ニ相成候而、今日者朝ゟ天気宜布候得共、七頃ゟ風者少々宛有之候、然所夜八頃ゟ以之外之大風雪吹荒候而、物音も不聞程之事ニ而、寒も一入強ク暫時も霽間も無之、明方迄雪吹荒通ニ而御座候、其外面白キ事者無之候、

十四日

一、風者夜前ゟ吹通シ申候、去共夜前之様成事ニ而者無之、朝ゟ少々宛和キ申候、乍併日之内者折々雪吹候得共、暮合ゟ夜ニ入候而者風も大キ和キ候処、又夜七頃ゟ又少々寒風吹出申候得共、左而已明方迄強キ程之事者無之候、其外昼夜共ニ差而相替申候義無之候、

一、当所材木町正行寺妻病死ニ付、昨日及案内候、手紙文言如左、

当十二日暮六ツ時、私妻病死仕候、公辺御用幷浄誓寺寺役之義被抑渡候ニ付、右御断由上候所如此ニ御座候、以上、

十二月十三日　　正行寺印

勝光寺様

御役僧衆中

右之趣申遣候間、委曲承届候ニ付、先暫見合可申旨、使之者ニ申遣候、此手紙受取、単司（〔筆筒〕）之引出へ入置候間、左様ニ可心得事、

十五日

一、江沼郡富野村之人を殺害致候者、昨日親両人・其夫婦・子二人獄門ニ掛り候由、正雲寺知通咄候旨、来生寺咄ニ承之申候、尤大聖持公辺ニ者其者之筋目をも絶シ度程ニ思召候由ニ付、如此ニ候由承之申候、

一、先頃於金沢御坊何之儀ニ候哉、講中不残寄合有之候節、於其場ニ横田内記何与なく申候者、此度兼役被仰付候能美郡一件之義ハ、各々何与被存候哉与被尋候処、誰何と申候者も無之各々無音之所へ、御坊弐拾人講中之内、四丁木町越前屋豊右衛門与申者出言致候者、被仰候義御尤ニ存候、唯今能美郡を当御坊へ御引寄附被遊候而も、御助成ニ相成候程之事も無之、且又御引附無之候而も、格別御坊之御借銀与申も無之候得者、敢而御引寄無之候而も不苦様ニ存候得者、就此義御本山之御心労ケ間敷義ハ承知難致候、各々者如何思召候哉与申候得者、並居申候銘々不残何様ニ被存候者、前々之通ニ被成置候而可然存候与各々及返答ニ候由、此間承候旨、筒金屋久兵衛ゟ御聞之旨、隣院殿御咄ニ承之申候、

一、当秋江戸神田明神御祭礼之日、登城日故各々御下り之節、神田町御通之御方者、加賀三家・水戸宰相殿ニ而候、且辻堅メ之面々者、元来公方之御祭礼故、為御馳走之諸国之旗本中ゟ被堅候、其上役者

公方之御家来ニ而御座候、然所ニ其町を最初ニ御通り被成可被掛者、大聖持松平備後守（利道）殿ニ而御座候を、御家老申候者、今日者神田祭礼ニ而候間、夫々御気を被付候而、乍軽可然奉存与備後殿へ言上致候而、家老之計を以其役所へ金子三拾両遣候得者、其賄賂ニ而大聖持殿御掛り候得者、号火事、人群り集り候を、其役所ゟ制シ候故、無難ニ御通り有之候、就夫富山松平出雲守（利與）殿其跡へ被通掛候所ニ、人夥敷群り打寄候而、御道具抔ニ手を掛候処を、騎馬八疋乗廻シ、踏倒シ候而、御乗物を払御通有之候、又其跡江水戸宰相（治保）殿御通可有之所ニ、又群集候人夥敷候而、挟箱をこほち或ハ鑓を折り、芳々以狼籍之至故、取手之者共、打而廻り取候処之人数弐拾三人取申候故、水戸殿者先無難ニ帰館被成候、然所ニ取候人数一々於水戸殿御僉議有之候所ニ、其内ニ水戸殿之御家来五人有之候、其者共者早速ニ御制伐被仰付候、残り拾八人之者を御吟味有之候得者、拾八人共皆其神田町筋之者共ニ而候ゆへ、重而水戸殿御登城之砌、公方江三ツ之願を被上候、一ニ者登城之日を御替被下候様ニ御願、私之義ハ格別ニ登城致度与之事、二ニ者若其事御聞届無之候ハヽ、神田明神之御祭礼之日限を御替被下候様ニ与之事、三ニ者若此義御聞届無之候ハヽ、神田町筋不残被下候様ニ与之事、右三ツ之御願有之候而事六ケ敷三共ニ難叶義ニ候得者、公方之役人中も行当り、存外之騒動ニ而候由、取沙汰致候旨、御聞之由、則隣院殿御咄ニ承之申候、

一、朝者夜前之風を吹通シ候而、折々者以之外風荒ク雪吹、又ハ雪・雹雪抔を吹付、もの騒敷候得共、九頃ゟ段々風も和キ候而、七頃過者大キニ静相成候、乍併時節柄大寒最早近ク相成候故、折々者少々宛風も有之雪吹抔有之候、夜も四ツ頃迄者折々雪吹有之、風も少々宛吹渡り候得共、四ツ過ゟ以之外之天気ニ相成候処ニ、又夜七頃より風無之候而、音もなく雪者降候様子ニ相聞、直ニ明方ニ相成候迄其通ニ而御座候、

十六日

一、夜前七頃ゟ風纔ニ有之、無音ニして降積候雪夥敷相見申候、今朝者一向ニ風も無之、雪吹もなく、四頃迄者静ニ候処ニ、夫ゟ少々風吹出シ雪降、雪吹次第ニ強ク相成申候而、道筋も人通稀ニ相見申候、九頃ゟ隣院殿へ御出来有之候而、参候ニも、蓑笠打着参候程之雪吹ニ而、夜五ツ過ニ帰寺致候所ニ、吹積候雪凡三四尺斗ニ相見申候、夜之内も九頃迄者風雪吹有之候得共、夫ゟ者音もなく唯如鵜毛雪吹降下り候、雪者落花ニ似而音もなく積候斗之様子ニ相聞申候斗ニ而、世上ニ音なく相見申候、

一、昨日之内ニ記置候金沢御坊寄合御使者内記之尋、越前屋豊右衛門答之趣ニ、肝要之事を書落候故、又々其一段斗を尓爰書載申候、尤成義ニ而御座候、其一段与言者前々書記申候通ニ、先月報恩講於御坊御執行有之候後、弐拾人講中寄合有之候節、京都ゟ御差下シ之御使者横田内記、惣中ニおゐて申候者、能美郡御影之一件兼役被仰渡候ニ付、如何取計候而可然哉与申出候処ニ、各々無音ニ候内、越前屋豊右衛門申候者、前ニ書記置候通申述、且者是迄御成就有之候御坊ニ候得共、最早弐拾人講中之不取持故、当御坊御相続之義も難成候ニ付、能美郡を新ニ引附、御坊御相続之助力ニも決而致候様ニ存候ハヽ、一ツ者是迄私共御取持仕候甲斐も無之、又私共之顔も難立奉存、尚又夫々当御坊附之御門葉中懇志を被運候所詮もなき事ニ奉存候得者、於私者何様共難申上候間、何卒宜布可為御賢慮旨申述、各々如何与同烈之衆へ尋候処ニ一統御尤ニ存候与相答申候中ニ、紙屋宗意・同庄右衛門両人者仏頂顔ニ而罷在候由承申候、則隣院先達而も此趣御咄ニ而候得共、書記之節落書致候ニ付、又々御咄故于爰書記申候、是肝要之義ニ存候、

私評者、宗意之存念者非義を巧ニ名利之財宝を貪り、号御為与、誰役人を加、党徒を構へ、前後を不顧、是非を不論、後代ニ為得名斗之名聞与被存候、又豊右衛門之存意者、本意を不失、是

迄附随候御門徒之心を組ミ勘考無益、是非を分別致申述候、一段自然与後代へ可残義ニ被存候得者、能申候様ニ被存候、

十七日

一、夜前ゟ降積候深雪夥布候故、今朝者雇人四五人雪おろさせ申候、且朝ゟも四過頃迄者折々雪降、又ハ雪吹候、九頃ゟハ雪者降止候得共、風者有之候故、雪吹者折々御座候、又七過ゟ者其風次第ニ強ク相成、夜ニ入候而者余程風も吹渡り、雪吹抔有之候、乍併先夜之通ニ者無之候得共、折々者大丸雪抔降、又八頃ゟ者余程雪も降渡り候様ニ相聞、明方迄其通りニ而御座候、

十八日

一、風者夜前ゟ吹通候故、日之内も朝ゟ折々雪吹、又ハ雪降候而、一入寒サ強ク御座候而、煤払致候者共難義之体ニ相見申候、乍併七半頃ゟ余程風も止ミ雪降、又ハ雪吹候事も無之、少々雨気致申候而、次第ニ空晴渡り、夜ニ入候而者雪吹無之、雪一向ニ降不申、静成夜ニ而御座候所、夜七頃ニも候哉、風又少々吹渡りはら〳〵と丸雪抔暫時之間降申候様ニ相聞申候、

一、江沼郡日末村之肝煎方ゟ当所八日市町勝円寺方へ火事見舞ニ遣申候ニ付、米壱石五斗船ニ為積候而、三人為乗申、一昨日出申候所ニ、寒風強吹戻り、雪吹夥敷候故、今江潟之辺ニ而凍付られ候故、助呉候様ニ声を斗呼候得共、潟之中程故、左右方ゟ行事不叶、南北ゟ舟路無之候而、一両日雪吹之中ニ居申候而、難義之様子ニ相見申候得共、不及是非取捨居申候由、山代屋善兵衛ニ承之申候、

十九日

一、朝者暫之間雪降、風も少々有之候得共、五半頃ゟ雪降止申候而、天晴成気色ニ相成申候而、暮合ニ者少シ風有之雪吹暫之間有之様子ニ相聞申候得共、夜ニ入候而者一向ニ風も無之、雪吹抔之様子者無之相聞申候、乍併夜者明方ニも相成居申候哉、余程之風一辺吹渡り候跡ゟ雪吹候様子ニ而、最早東雲近ク寺院之洪鐘太鼓之音相聞申候、

一、今日四頃ゟ於隣院殿御仲間不残集来有之候而御示談之上ニ而、先達而九月十四日出シ集会所へ指出申候当郡御門徒中ゟ之歎書付、如何取計可申哉之義相伺申上置候得共、於干今何之義も御申越無之候、為催促此度紙面差登セ申候文言如左、

一筆致啓達候、先以御門跡様御機嫌能被為成御座恐悦奉存候、然者当郡御真影御供上京之義ニ付、一郡御門下願書写、九月十四日出飛脚を以相伺申上候趣、如何取計之義相心得可申候哉、今以何之御沙汰無之、又々紙面を以相伺申候、右可得御意、如此ニ御座候、恐々謹言、

称名寺印
勝光寺印
本覚寺印
本光寺印
勧帰寺印

十二月十五日

集会所
月番衆御中

右之通相調候、執筆隣院殿之御内次郎兵衛ニ而候、且又御集来次手ニ決談致候事者、当郡一件元来本蓮寺巧有之候事故、以後御真影当役難相送之由ニ付、則書面相調申候而御本山家老中へ遣申候、其文言如左、

一筆致啓上候、先以御所様方御機嫌能被為成御座、恐悦奉存候、然者当郡御寺法御用年番之義、当所本蓮寺年来様子も有之候哉、取斗不宜差支之趣共御座候、仍而当役相送不申候、尤御用筋之義ハ其年当役相達可申候、右御断申上置候、恐惶謹言、

称名寺印
勝光寺印

十二月廿日

本覚寺印
本光寺印
勧帰寺印

月番
御家老御衆中

右之通相調遣申候、執筆則次郎兵衛ニ而御座候、此紙面為登申候、元来者今度御差下シ之御使者横田内記取計ニよつて、万一和睦等之被仰渡候得者、畢竟者当役差送申候者而ハ難叶、其砌ニ当而彼是之義有之候而ハ、邪魔候得者、申出無之内ニ本蓮寺之手を切度、各々御示談ニ而、右之書面相調遣申候、元来御差下シ之内記者、双方之中へ入取計可致様ニ相心得罷下り候与之趣、先達而風聞も有之候ニ付、右之通御示談決申候、

二十日

一、朝者夜前之風之跡故ニ候哉、五ツ前迄者少々宛丸雪抔降、又ハはら〳〵雪も降渡候得共、最早五ツ過ニも相成候得者、天晴之気色ニ相成、風も止ミ、丸雪之吹抔も相止ニ候而宜布候、夜も一向ニ風雪吹抔無之静成事共ニ御座候、其外昼夜共ニ面白事共者承不申候、

一、先達而書記置候江沼郡日末村ゟ出申候米積舟之事、今江村・日末村両村ゟ昨日助船出申候而、堅氷を割申候而、無難ニ日末之方へ引越申候由承之申候、

二十一日

一、朝ゟ曇気色ニ而、暫時之間五ツ頃者雪降候得共、早速ニ降止候而、四前ゟ者荒気色ニ相成、空曇り、風そよ〳〵吹下り候得共、降物者不致候処、七頃ゟ者雨頻ニ降下り風も余程吹渡り申候ニ、暮六頃迄ハ雨降止不申、夫ゟ者雨霽気色ニ相聞、又夜ニ入候而者、五半頃歟之節ゟ風少々宛荒吹、次第ニ風音も荒ク折々者吹申候而、夜八頃ニも候哉、又雨頻ニ降出申候得者、風者少々静ニ相成候、乍併折々者風もほう〳〵と吹渡り、雨者其儘ニ降続、終ニ東雲ニ成申候、其外昼夜共ニ珍布面白事者無之候、

二十二日

一、夜前ゟ之雨気ニ而、朝ゟ折々雨抔降申候得共、四頃ゟ雨滴而已ニ而、其後者裏西風ほう〳〵と吹渡り候而、八頃ゟ者少々宛折々雪吹降、寒風次第ニ荒吹申候得共、去共強キ事者無之候ニ、夜ニ入候而者折々強ク荒吹候而、夜八半頃歟之様ニ覚申候ニ、以之外風強ク雪吹音すさまし く候得共、東雲近相成候而者、漸々風も和キ候、去共雪吹寒風抔者折々音聞へ、其儘ニ夜者明り申候、其外昼夜共ニ相替候事無之、又面白キ事も無之候、

二十三日

一、夜前ゟ吹通候寒風雪吹ニ而候得者、朝ゟ折々雪吹候而、寒風頻ニ吹渡り候得共、四頃ゟ八半頃迄者天気宜布、雪吹之霽ニ而御座候処、又々七頃ゟも折々落風抔致、雪吹繁布、雪・包雪抔吹付候而、音すこく聞申候、暮合ゟ少々雨気ニ候哉、軒毎ニ雫之音抔相聞申候得共、夜ニ入候得者頓而寒風はけしく候故、雨気相止ミ、又四頃ゟ者余程之雪吹寒風強ク吹渡り候而、何様ニ七頃迄も荒候得共、追付霽揚り明方ニ者相成申候、其外昼夜共ニ差而面白事者承不申候、

一、於称名寺殿年忘之会相催候而、隣院殿幷本光寺殿・弊出合申候而、卓子之年忘致候而、様々和譯之御咄抔承候而、楽申候、

二十四日

一、朝者前前之霽上り気色ニ而、六半頃者静ニ有之候得共、其後者少々風出吹渡り、折々雪吹抔致申候、去共七半頃ゟ者雪吹等も無之、入日輝渡り候而、風も止ミ殊ニ静ニ相成申候而、暮合ゟ者尚一向ニ物音無之候得共、夜半過頃ニも候哉、唯しと〳〵と雪降候様子ニ相聞申候、乍併明方迄降続候様成事ニ而も無之、一両度も雪之降候様子ニ相聞申候斗之事ニ而候、其外昼夜共ニ相替面白事も承不申候、

二十五日

一、今日寒気見舞ニ出申候処ニ承候時者、此間老母ゟ御文通有之候

所、頃日者毎日〳〵横田内記幷澍法庵寺社所へ内談ニ出申候様子ニ相聞申候而、是非ニ此度者当郡御真影者取上可申与之事ニ而、先最初ニ者此一品述候迄ニ而、横田内記差向候筈、其後者為御使僧澍法庵差向、是非此度者御真影を可渡様ニ与被仰出候間、受取可申与申張候而、若々澍法庵ニ而不相叶候ハヽ、寺社奉行直ニ可向与之趣ニ相聞申候与之事、承之申候与、御申越被成候趣、則赤井殿御咄ニ承之申候、

一、当暮永原求馬（孝乗）台所以之外難渋ニ付、紙屋宗意方ゟ銀子弐拾貫目借渡申候、是故ニ右之様子寺社奉行直ニ当所へ可向与之取組ニ候哉之趣、風聞致申候哉与、赤井殿御咄ニ而御座候、

一、紙屋宗意、初而今江村源助旅宿へ尋見舞候て、様々咄申候内、能美郡へ被下置候御真影、当夏以来御供上京之儀、御本山ゟ申来候所ニ、于今御上京無之様子ニ相聞申候、如何之訳ニ候哉、小松御近所之義ニ候得者、様子御聞之事も無之哉与、相尋申候ニ、源助申候者、私之義ハ住所者今江村ニ候得共、出生者外之者ニ候得者如何之訳ニ候哉、能美郡御真影之由来者存不申、且又今度御召ニ付、上京無之訳も其通常住出府致居申候得者、存不申候与相答被申候得者、宗意又申候者、成程其通り御出生者外ニ候得者、委曲御存知無之候も御尤ニ存候、能美郡之御真影之由来者是々与次第ニ語咄申候而、加様之趣ニ候得共、此度者是非共ニ御真影者御引取可被成与之趣故、御使者幷御使僧御差下シ之事ニ候得者、御渡無之候者而ハ、叶申間敷義御座候与申候■、源助又申候者、其義ハ如何有之候も委細ハ存不申候得共、其御真影者私玄祖父之代ゟ今日者奉尊敬居申候得者、唯只今迄も仮令私死去致候共、其節之御導師ニも御立被下候様ニ奉存居申候得者、他郡へ之御出も難成奉存候得者、勿論御供御上京抔与申事者難成与申切参候与咄被申候趣、赤井殿御咄ニ承之申候、

一、紙屋宗意御使者横田内記ニ向申候趣者、今度能美郡之御真影を取受、能美郡を当御坊へ付度、元来之望ハ御本山幷当御坊之為を相考、且又近年御本山も御難渋之御様子を聞ニ付而も難忍、今迄之通ニ能美郡も致置候而者、畢竟御本山之御為ニ者難成ニ付、取組候事、尚又当御坊も御破損も難続候間、彼是以無理与乍存、是迄存立候事ニ候故、能美郡ニ而者難渋を付込、本蓮寺を抱留置候事ニ候得者、今度貴公ニも御仕負無之候ハヽ、御自身を申受度、尚又本蓮寺をも打つふし可申与述申候、是ニ腰折致候哉、横田氏も頃日者以之外働申候様子ニ相見申候、且御本山之御難渋之様子乍存、加様之趣仕負不被成候者而ハ、貴公ニも御家来ニ而有なから、御家来ニ不有道理ニ而御座候抔、宗意申候与之趣、且又此一件者宗意・澍法庵・本蓮寺、是三人ならてハ取組之、加党徒無之候、乍併宗意も心底を打払申候而、澍法庵ニ不及示談、又樹法庵も内証打消而本蓮寺ニ不申、雙方互ニ打消候事も無之由ニ相聞申候、何之道ニも差向候砌者、心得顔ニ而者、叶間敷間、唯而承候事之様ニ取成シ、先ハ示談、尚又当郡御門末へも為聞候上、御返答可申上与之取計ニ被成候而可然、乍慮外存候与源助咄被申候由、則赤井殿御咄ニ而承之申候、

一、朝者少々雪吹有之候得共、早速ニ霽、気色宜布相成申候、去共又八半頃ゟ者風も荒吹渡り、折々者雪吹、又ハ丸雪抔降候而音すさましく、尚又暮合ゟ夜四半頃迄者折々風雪吹頻ニ吹付候得共、夫ゟ者次第ニ音も静ニ成候而、終ニ東雲頃ニおよひ申候而殊ニ静ニ聞申候、其外昼夜共ニ面白珍布事者無之候、

一、西御門跡様来三月歟相延候而、八月者定而越前吉崎へ御下向可有之筈ニ候所を、当郡一件之義を取組候ニ付、若能美郡法中御下向を幸ニ、帰山等之義も有之間敷義ニ而も無之候得ハ、様子無心元存候哉、越前福井殿家中大身中幷家司中等へ手を入候而、来春御門主之御下向を差留候者、紙屋宗意ニ而有之候由、赤井殿御咄ニ而承之申候、是等之様子者何様ニ宗意も工ミ（巧、以下同）強ク、無此上も悪者ニ而御座候、誠ニ御本山之御難渋之義者承候ニも、御気之毒ニ奉存候得共、被仰出候得者、誰と而も身ニ替へ御取持も可致筈ニ候得共、其御難渋を

申立ニ致、新規ニ能美郡を金沢御坊へ引付候ハんと之悪ル巧ミ、且其上当郡へ自御先代御免被成置候御真影を取上可被成様ニ与之巧ミ者、実ニ先達而之御意を反古ニ致、我慢を働キ、名聞利養を本として、真実を以セす、自見之覚悟を募（ツノリ）申候、不似合取組事、言語道断之禅門ニ而候、加様之工ミも有之候而之事ニ候哉、是迄御本山江上納之銀子九拾貫目ニ候旨、直ニ其咄承候者之咄ニ而候、且又当夏宗意上京之節も、唯何与なく御難渋与申事承候故、乍寸志金子弐百五拾両、御本山御台所へ上納致候与、是又其者源助之咄ニ而承、宗意直ニ咄申候由承之申候、是等之趣向共皆悉能美郡を引付、我年来之望之通ニ致度下取組之様子ニ相聞申候、抽候而人ニ被誉候事者、事ニ寄候事ニ御座候、宗意之仕方者難有而已斗ニ而も無之、右之取組事之下つくろひ之様ニ相見申候抔、則赤井殿与御咄合申候、

二十六日

一、朝者風而已少々宛吹渡り候得共雪吹抔者無之候処ニ、五ツ過頃ゟ日之内者折々雪吹有之、且雪・包雪抔も折々降敷申候得共、暮合頃ニ者、暫之間霽明り申候得共、又々夜ニも入候得者さら〳〵と丸雪抔降候音致、又ハ雪吹之音も致申候而、夜ハ東雲ニ及申候、其外昼夜共ニ面白キ事も承不申候、

二十七日

一、御本山ゟ御差下シ之御使者横田氏幷御使僧澍法庵、元来者当月四日頃ニ当所へ被差向候工面ニ相極居申候得共、又示談替候而、当廿日過ニ被見候筈ニ相極候処、又候相延申候而、来正月十日ゟ前ニ其地可差向之様子ニ相聞申候与之趣、則赤井殿御母公寺社奉行中之内ニ手筋之方有之候故、其方ゟ御聞被成候趣之由、此中御文通有之申来候旨、則赤井殿ノ御咄ニ承之申候、唯何事も無之、当郡へ御免成下シ被置候御真影を取上可申与之巧斗ニ而御座候、乍併評義之通成重キ趣ニ者不申掛趣ニ相聞候間、此趣相心得も可有之段、是又赤井殿御咄ニ而御座候、

一、朝ゟ雪吹抔有之候而、寒風弥増ニ候、乍併日之内ニ一両度も折節者照々而、日光輝候様成事も有之候得共、暫宛之間共ニ而御座候、暮合ニ者少々雨気致候哉、軒雫落候音致申候得共、夜ニ入候而者寒風頻ニ吹渡候故次第ニ寒シ、凍堅ク相成申候而、勿論夜之内も折々者雪吹、又ハ包雪抔降候様子ニ而候、去共明方近ク相成候而者、暫時斗七半頃ゟ物静ニ相聞申候、其外昼夜共ニ珍布事者無之承不申候、

一、夜四前ニ門ンを扣（叩カ）候間、開キ候得ハ飛脚之体ニ而内へ入申候、様子相尋申候処ニ、金沢掛造り橋場（バ）町小柳屋七郎兵衛与申者之方ゟ参申候、委曲彼方之書面有之候、包紙表ニ者、

小柳屋
七郎兵衛

勝光寺様
与有之候、又裏ニ者、
十二月廿七日
金沢橋場町
小松東町ニ而
与有之候、其書状文言如左、

口上

以手紙申上候、然ハ私方ニ罷在申候宇兵衛与申者、此間相滞申候所、昨日病死致し申候ニ付、御案内申上候、依而今晩爰元ニ而同宿衆ニ而も相頼送り申度候間、乍御苦労なから御紙面壱通被遣奉願候、時節から故早速かるくほうむり申度候、右よろ敷奉願上候、以上、

十二月廿七日

書状之文言如右、飛脚ニ参候者之名を相尋候得者、同所掛造り升屋平右衛門与申者ニ而候由申候、就夫飛脚之者与段々及僉議候所ニ、当所之町家名付引さき紙ニ書記有之候物、則飛脚出之申候、其書記候紙ニ者、

小松ぬしや町

津幡屋
弥兵衛せかれ
間兵衛
小兵衛
しやて

と有之候、是を拠ニ致、是非ニ当寺之門徒ニ紛無之候間、葬式相勤申候様ニ、紙面壱通可被下旨申、且御使僧被下候ハヽ、尚又難有事ニ而御座候抔、飛脚之申候得共、手方申候者、是迄当所於塗師屋町津幡屋之何某与申者有之、当寺之門徒成由承不申候得者、与得門徒帳抔相改、其上ニ而法名等、尚又葬式可勤之旨可申遣間、先夫迄者下宿可致旨申聞候時、飛脚之者申候者、御尤ニ存候、乍併当所へ者初而之義ニ候得者、旅宿之義御指図可被下由頼申候、又申聞候者、成程旅宿之義も是ゟ可致筈ニ候得共、病死之人者いまた当寺之門徒共不相知内ハ無心元候間、旅宿之指図者難致候得者、当所京町へ参候而旅宿之義頼申候様ニ与再三申聞候而、暫ク奥へ参申候内ニ、先飛脚之者ハ旅宿へ参候後、右遣申候手紙之返書相調へ申候、其文言如左、見而可得、

口上書致披見候、其許ニ罷在候宇兵衛与申者、今搬致病死申ニ付被及案内、伴僧ニ而も指遣候様ニ被申越候得共、右宇兵衛与申者へ先達而寺請状等指出置不申仁之事ニ候間、今般伴僧・法名等差遣申儀難成候間、左様御心得右宇兵衛請人へ御渡候ハヽ、夫々訳立可申事ニ候、以上、

十二月廿八日　勝光寺
小柳屋　役僧
七郎兵衛殿

与返書相調へ、則執筆埴田屋長兵衛ニ而御座候、然者段々評義致見申候所、当九月ゟ之奉公人ニ而者無之様子ニ相見申候得共、唯雇人之様ニ致置候内、次第ニ年月重り候得共、請人寺請状無之候故、只今病死ニ付主人之手ニ付申候様子ニ相見申候、又ハ変死致候ニ付、仮令請人有之候与も受取不申哉、此両要之内ニ而何事も唯主人之手ニ付候様ニ相聞申候、則書面返書翌朝飛脚へ渡遣申候、取次知照、

二十八日

一、早朝ゟ雪吹、暫時も止事無之候、乍併五頃ニ者照々与日も為出候得共、又曇り、又ハ晴レ、八頃過迄ハ雪吹、寒風折々雪・包雪抔も降下り候、夫ゟ者少々雨気へ相成候哉、軒之雫之滴々与相聞申候、且暮合ニ者さら〳〵と丸雪之降候音致申候、夫ゟ夜ニ入候而も、雪吹荒抔致候様子ニ者相聞不申候、唯物静ニ而及明方ニ候、

一、当暮於御算用場御払方御差支ニ付、当廿六日ニ粟ケ崎木屋藤右衛門を御召被成、此度為御用金千六百貫目被指上被申候様ニ被仰渡、則承知致帰申候、日限之義ハ廿八日四頃迄之内、右之銀子可被指出之旨承知致帰申候、俄之金子故、以之外意隔[隔意カ]致候、乍併大体者出来可有之様ニ相見申候与、赤井殿御咄ニ承之申候、

二十九日

一、今朝五半頃ニも候哉、当所鍛冶町小原屋太右衛門参候而、私共一門之仁、金沢掛造り橋場町小柳屋七郎兵衛方ニ罷在申候、当所塗師屋町津幡屋弥兵衛せかれ宇兵衛与申者、当廿六日病死致候、法名斗を呉候様ニ頼申候、則一昨日飛脚を以申上候得共、間違之品被仰聞、御尤ニ存候、夫故又々則宇兵衛弟小兵衛与申参上仕候ニ付、只今是へ参候筈ニ御座候間、何卒法名斗を呉候様ニ委曲頼聞申候ニ付、暫為相見合候内、右之小兵衛参申候而、歎申聞候故、弟一拾五年以来寺請状を取不申、他所へ罷出候而、永々之間無音信居申候事等を呵嘖致申候後、相尋候得者、則其後津幡屋弥兵衛与申者者小原屋太右衛門親抔与者いとこ御座候而、当寺之門徒ニ紛無之候得共、只今者家も無之、其悴共右之通ニ金沢ニ罷在申候間、何卒此上者法名を呉候様ニ委細頼申候ニ付、了寿与申法名指遣申候、則小柳屋七郎兵衛方へも右葬之頼紙面、役僧共ゟ指遣申候、其文言如左、

今般爰元ニ罷在候宇兵衛義、当所塗師屋町津幡屋弥兵衛セかれニ而、当寺紛無之候、与得遂吟味候処、一家之者共ゟ右宇兵衛病死之旨及案内ニ候ニ付、委曲逐一承之候、依之法名差遣申候、及押詰乍御世話葬等之義宜布御取計頼入候、右之趣院主ゟも宜布被申付候、委曲之義御頼申候、以上、

小松勝光寺　役僧

十二月

金沢掛造り橋場町
小柳屋七郎兵衛殿

右之通相調、則弟小兵衛へ相渡申候、其節小兵衛様子相尋申候処、則金沢堀川之銭屋ニ罷在候与申ニ付、左候ハヽ来春者早速ニ寺請状取ニ参可申旨為申聞候得者、委細承知之上喜ひ、太右衛門同道ニ而罷帰申候、

一、朝ゟ余程雪吹、風も有之候得共、五頃ゟ次第ニ天気宜布相成申候而、雨気ニ相成候哉、軒之雫之止ム間なく滴申候、去共日之内照々与致候事も無之候得共、降物者一向ニ致不申候、暮合ニ者又薄曇り居申候而、五半頃ニ者少々風吹渡り候処、暫時之間風も止ミ申候而、夫ゟ者物静ニ而、夜ニ入申候程雨気ニ相成候哉、明方迄軒之雫之止申候事者、差而無之候、其外昼夜共ニ面白事者承不申候、

三十日

一、朝之間者、暫時雪吹も少々有之、包雪抔も降敷候得共、早速ニ霽渡り、次第ニ気色宜布相成申候而、風抔も無之、日之内者静成事ニ御座候、又四頃ゟ者少々雨気候哉、軒之雫之止間なく滴申候而、暮合も尚静ニ夜ニ入候而も大晦日成、往来之人之挑灯も尚、向陽之物用意、唯しと〳〵と勇能候程ニ、最早天北星移り候得者、各々往来之足を留メ、目出度向歳を迎居申斗ニ候、書記所烏兎畢

「称㊞名寺」

明和六己丑年極月
大晦日烏兎于爰畢
打越山（勝光寺）拾一代之主
無一斎周好記之

（裏表紙）

「称㊞名寺」

「佐㊞々木」